

オーデンの眼

——現代詩と神話——

現代を読みとるといふことの如何に困難なことか。その口火を切った途端に、読みとるといふ態度規定そのものが既に問題にされそうである。渦中に如何に行動するかが問題である、と。作家や詩人の眼と行動が問題になるのもそこだ。しかし、行動への問いかけといふことが、行動直前にも最中にも直後にもつきまといてくる。行動を迫る現代の現実の緊急性にもかかわらず、行動してしまつた後に残る空洞の中に、何かに問いかけ、何かを讀みとろうとする或る思ひは続く。そもそも読みとるといふことと行動することとを分けて考えることが現代相の一面である枯渴か分裂の尺度にかかっている。懊悩を思考以前として分つた科学が尺度によつてものを読み流し

増谷外世嗣

てきた落し穴が、懊悩としての読みとろうとすること、思考することを行動から切斷してしまつたのである。

Action is transitory—a step, a blow

The motion of muscle—this way or that—

'Tis done; and in the after-vacancy

We wonder at ourselves like men betrayed:

Suffering is permanent, obscure and dark,

And has the nature of infinity.

百年以上も前にワーズワスが作品 *The Borderers* の中で歌っているこの *Suffering* 懊悩は、感じのいと、惱

まされること、読みとろうとすることであるが、それが移り行く行動の暫時性と対峙して捕えられている認識の仕方が問題なのである。

行動と思考の分離が、十九世紀初頭の詩に現れていることが特別新しい発見であるというわけではない。行動と思考の分離の基底にはそもそも認識と肉体との分離がひそんでいる。マニエリスムの捕捉やイエイツの指摘する処によっても、ルネッサンス末期から十七世紀にかけて、人間の時間、空間意識がものからはなれ、時間、空間、言葉の独り歩きが始まった頃に端を発している。その独り歩きの歴史の積層によって確立されてきた科学的思考、認識のメカニズムは何ものかを排除して行った。その奪い去られた何ものかが動因となって苦悩する思考が詩である、としたこと、詩にのみ、詩的空間と時間——コールリッヂの曰く苦悶する想像力の顕現——の中にのみ、その認識と思考を実現させ得る場あり、とした所に、現代における詩の、科学に対する姿勢を確立して行く発端があったといえる。この方向への暗示が、ワーゾワスの散文ではなくて、詩そのものの中に現れていることに今私は注目せざるを得ないのである。

事実意識と虚構意識、fact と fiction との分断を促進した便宜意志、十九世紀の潮流の中に歴史は事実と科学、尺度的思考に結びつき、懊悩の認識化としての詩はレトリック的位置に落ちたのである。イエイツやエリオットの打ちだした警鐘が、詩は呪いであり、祈りであり、踊り、であることを響かせる中に、後統する現代詩人達の多くが、「詩は行動である」という逆転的帰趨を積極的に詩に打ち出して行った。この現代詩観は科学的認識がものを otherness 客体、として捕えようとしていること自体の中に、自他の witness 連結性、同時共有性を消去してしまった誤謬の世界からの脱出でもある。

脱出とはいえ、otherness の世界から witness の世界を生み出すことである。自他の合唱の世界へ帰ることである。しかも、帰路は暗路か砂漠。その中で、散文を拒否する世界として詩は新にして古い姿勢を積極的に打ち出して行かねばならなくなった。

オーデン以後という現代詩の領域がある。詩の解放という。いわば、イエイツやエリオットによって捕捉され肉化された詩の領域でも、捕捉からもれて行く現実の暗か亀裂か空洞を更に捕捉せんとする努力が詩の解放とい

う角度からとらえられたものである。詩人の側からすれば、詩によって捕捉され表現を与えられる領域が現実の或る面に限られているような束縛感からの解放、つまり、散文によらねば捕捉できないとされていたような現実を詩に肉化する努力であるが、それは同時に、現実が散文的解釈のまま放置され、散文によって読み放されたままになっているその事態の奥底から肉化を迫られていることでもある。

それ以外の様式に転化されたり翻訳されることを拒む様式としての詩を現代世界の解釈や経験解釈の道としたことはイエイツやエリオットもさることながら、オーデンにおいて尚一層、厳守された。詩に肉化しない、散文による経験の描写は原体験をばらばらにしてつなぎ合せた事実記録にすぎない。このことを厳に戒めてきたオーデンはその拒否の世界によってのみ生み出される世界を求め続けたのである。他の現代詩人達と比較して、表面の一読によれば、*maps and maps* に墮し、或はディラン・トーマスの *worm-eye* に対して *bird-eye* と言われて、論議のかもされるオーデンであるが、それらはあくまで現代の隅々までを徹底的に詩で読みとろうとするオ

ーデンの長く、広い努力の一面を、恣意的にとり出した断片評にすぎない。

そして、この複雑な捕捉しがたい現代、その現実、その経験を読みとる眼を何処におくか。オーデンはその眼のおき処をさがし続けたともいえる。歴史眼、サイコロジカルなメス、実存主義的な心……とオーデンの具える幾つかの眼が指摘されるが、それらは現代を読みとる支援となり、オーデン的舞台に登場する風景とはなっても、オーデンの眼をおいた位置というか方位ではない。

‘Consider this and in our time / As the hawk sees it or the helmeted airman’——現在、只今のこの事態、その解読を迫る現実を、鷹の眼、ヘルメットをかぶった飛行士の眼で見よ、というオーデンは、解読を迫る現実の緊急性と同時に、その緊急性が迫りがちである近視眼的な或いは一方的な盲点を排除する鋭い鷹の眼、現代の中にあって、しかもその時間と空間を俯瞰する飛行士の中にある眼をもって、現代の現実という獲物に一瞬にして高く、広く、深く、いどみかかる眼、それをすえる時間と空間をさがし求めて放浪したともいえる。

we approached our target,

Conscious in common of our closed Here

And of Them out There thinking of Us

In a different dream, for we die in theirs

Who kill in ours and become fathers

Not tricky targets their trigger hands

Are given goals by ;.....

.....We watched others

Drop into death ; dully we mourned each

Flare as it fell with a friend's lifetime,

While we hurried on to our home bases

To the safe smells and a sacrament

Of tea and toast. At twenty to eight I

Stepped on to grass, still with the living,

While far and near a fortitura

Of brooks and blackbirds bravely struck the

International note with no sense

Of historic truth, of time meaning

Once and for all, and my watch stuttered :...

Many have perished ; more will.

(The Age of Anxiety)

(的を求めて空爆に向う飛行機(の)) Here にあるわ
れわれは地上から There どころ Them どころの
的、Us であり、互が互の夢か意志の中では殺し合う的
であるが、その互の引金が的中したのは敵味方でもなく、
的でもなく天上の fathers と化し、..... 焰となって死に
行く友の生命を見ながら基地にづく。八時二十分前、草
原におりたては、小川の虫や鳥が鳴く。何の歴史的意味
もまたなく、())を限りの時間の中で。時計はどもった。
' Many have perished ; more will.')

For us like any other fugitive,

Like the numberless flowers that cannot number

And all the beasts that need not remember,

It is to-day in which we live.

So many try to say Not Now,

So many have forgotten how

To say I Am, and would be
Lost, if they could, in history.

(Another Time)

(花は自ら無数であると数えることはできない。獣は記憶する必要もない。どんな逃亡者にも明日や昨日はない。そういう自給自足、自己充足しているもののようにわれわれ人間にとっても生きてゐるのは今日だ。それなのに「こんなに多くのものが」今を否定し、「こんなに多くのものが」只今、自分がどうあるかを言うべきすべを忘れ、できることなら、歴史の中に失われて行くのだから。)

No wonder so many die of grief,
So many are so lonely as they die;
No one has yet believed or liked a lie,
Another time has other lives to live.

(多くのものが悲しみと孤独の中に死んで行くのは当然だ。誰しも嘘の時間を信じもしないし好みもしたわけが

はないのに、それを生きてきたのだから。もっと別な時間が生きるべき他の生命をもっているのだ。)

ブリュッゲルの描いた「イカルス」の絵の中に、突然空から落ちてくる少年イカルスの姿と共に、それを見たものもあつたであろう豪華な船が、やはり依然として広い平和な海を目的地へとすべり、一方陸地には、イカルスの海に落ちたぢゃぼんという音を聞いたかも知れない農夫が、やはりそれとも知らず、畑に鋤すく無縁の時間と空間を捕えた巨匠の眼にうたれたオーデンは、苦悩する人間の心が位置する時間と空間——殉教者、戦争に行く者の生きてゐる時空——とは別に、その傍で草むらに鳴く虫、木に鼻こすりつけてゐる馬の生きてゐる別な時間、間に耳目を傾けざるを得なかつた。それは同時にその別な時間の中に共存する只今自らの存在を確かめたい一念であつたといえる。

それなのに、人間の刻んだ「Time」お時間様」は、苛酷である。

The hour-glass whispers to the lion's roar,
The clock-towers tell the gardens day and night,

How many errors Time has patience for,
How wrong they are in being always right.

Yet Time, however loud its chimes or deep,
However fast its falling torrent flows,
Has never put one lion off his leap
Nor shaken the assurance of a rose.

(Our Bias)

(秒時計や時計台の時間様はライオンに、庭園に日夜、時間をつける。そのライオンや庭園が時間様に合わぬいエラーにいらだつ。彼らが常に正しくあることにおいて如何に彼らが間違っているかと。だがどんな時間様が大声でわめこうと急こうと、ライオンは跳び上りもしないし、バラ一輪震いもしない。)

本当の生命は別な時間を生きているのだ。だが現代のわれわれは数字に刻まれた時間と歴史的時間に埋れて行くのである。現在は不在である。Many have perished; more will.

死滅しては人間の意識と記憶の中で積み重ねられて行

く過去を背負うつゝ、死を予想するの His past present, presupposing death の場で、生誕と死との間に、刻まれた時間につながって分裂し気狂いとなり、商品となり、仕事と家庭との間にわずかに残された hiatus 自由な間隙も、新聞、雑誌で読まはなれて行く。

The train-ride between your two natures,
The morning-evening moment when
You are free to reflect on your faults still,
Is an awkward hiatus, is indeed
The real risk to be read away with
Print and pictures, reports of what should
Never have happened, will no longer
Expect more pattern, more purpose than
Your finite fate. (Age of Anxiety)

無限を有限に刻んだ運命か必然性の中に埋れて、それ以上のボタンも目的も持たない現代が、『不安の時代』の表面に描き出されてくるが、しかしこの『不安の時代』の不安、anxiety とは、この世に放り出された有限的運

命の一片が何処へ向って志向すれば分らないながら何処かにこの有限の運命から脱出する方向を暗中摸索する、その不安である。

『不安の時代』の舞台はバーである。仕事が終わるか、或る大きな *historical process* が一段落した虚空の時間に、人は酒場へと行く。この酒場は *necessity* から解放される場であり、そこに生じる *freedom* は *boredom* であるが故に酒場は現代かくべからざる或る場所と時間を提供しているのである。昼間閉じられていた眼を醒まそうとする。白日の下には覚醒を禁じられ、封じ込められていた暗を薄暗の酔の世界で醒まそうとする。『不安の時代』のバーは朦朧の中に呼び出す覚醒の場である。制服や記章はとられ、閉ざされた心もひらけ、他者と自分との距離は近づき、表皮から奥へとまさぐり始める。客観と主観の境界線は薄らぎ、客観に支配され、客観の中で考えていたと思っているその客体としての自分が、実は、

His pure I

Must give account of and greet his Me.

That field of force where he feels he thinks,

His past present, presupposing death,

Must ask what he is in order to be

And make meaning by omission and stress,

Avid of elseness……

であることに気づく。

客体的自己というか、目的我というか、過去と未来によって押し出され、はさみうちにされているこの Me に支配された世界では、もはや I am は成立し得なくなっているのである。われわれは省略と強調によって It is や I am を成立させ、意味を成立させ、考えていると思っただけである。その省略と強調以外に洩らされたものは遂に捕えられないままに、客観的限定は細分に細分を重ね、ローレンスの曰く、言葉はぶよのように人間にかみついてくる。唯「もしそうでなかったら」「もしそうでなかったら」と限りなく限定を否定し、はぎとることで「分裂から逆行することによってのみ、その elseness の世界にさまよい出して行けるのみであると考えられる」と人間は考えているようである。有限でありつつ無限を

志向する。しかし、それは現実には一つの限定を否定し、はぎとっては又別な限定をする、その作業の繰り返しかも知れない。ただ打消すことによつてのみ此方から彼方を志向することが『不安の時代』の中に延々と続く。酔いの度合によつて、(時は流れる)から(時は飛ぶ)、(時は回転する)と移る。しかし、何処へという行手か方向は霧に閉ぢられて行く。だが深く酔ひ醒まされた眼は方向、遠近感覚をこえてすわり、そこでは尺度なびたる時間の逆流も、空間の透視も可能である。

No Time returns, a continuous Now
As the clock counts. The captain sober
Gulps his beer as the galley-boy drunk
Gives away his water; William East
Is entering Olive as Alfred West
Is leaving Elaine;.....

And who runs may read written on walls
Eternal truths: 'Teddy Peterson
Never washes.' 'I'm not your father

You slobbering Swede,' 'Sulky Moses
Has bees in his bush,' 'Betty is thinner
But Connie lays.'.....Who closes his eyes
Sees the blonde vistas bathed in sunlight,
The temples, tombs, and terminal god,
Fall by a torrent, the etruscan landscape
Of Man's Memory. His myths of Being
Are there always. In that unchanging
Lucid lake where he looks for ever
Narcissus sees the sensitive face
He's too intelligent to trust or like
Pleading his pardon. Polyphemus
Curses his cave or, catching a nymph,
Begs for brotherhood with a big stick,
Hobbledehoy and helpless.....

.....For Long-Ago has been
Ever-After since Ur-Papa gave
The Primal Yawn that expressed all things
(In His Boredom their beings) and brought forth
The wit of this world. One-Eye's mistake

Is sorry He spoke.

(「いや、時間は帰ってくるんだ。ちゃんと時計が勘定してやるように何時も今なんだ。しらふの船長がビールのガブ飲みやってりゃ、酔っぱらった甲板ボーイが小便してる。ウィリヤム東様がオリヴとやってりゃ、アルフレッド西様はエレンとお別れ……忙しく走り回ってる奴にも壁の落書、永遠の真理は眼に入る。『デディ・ペタソンは洗ったことがない。』俺はお前のようなろまなスウェーデンのおやじじゃない。』むっつりモーゼのひげは蜂の巣だ。』『ベッティやせてコニーは肥る。』——一方、じっと眼を閉じる者には、日光に照らされた淡い黄金色の景色がうつる。お寺、お墓、仏様、人間の記憶の中にある大昔の風景が。存在の神話はそこいらにいつでもあるんだ。あの美しく澄みきった湖には何時でも顔を映しているナルシスがいて、あんまり知的で好きにもなれない信じられもしない自分の敏感すぎる顔を見ては謝っている。……むかし、原始の大お父さんが始めて大あくびをして、そこに万物を表現した。その Boredom に万物の存在はあり、この世の知恵は生れたのだ。爾来、

(「ちうっとむかし—Long-Ago) は (それからずっと—Ever-After) になつてしまったのだ。一つ目巨怪の間違ひは残念ながら喋ってしまったことなのだ。)

(むかし、むかし) お姫様と王子様が幸福にくらしていた処に……或る事件はおきました……そして、(それからはずっと) 二人は幸福にくらしました、その中間の不幸な出来事が、失樂園を呼びおこさせるなら、この Boredom から生れる wit of the world は In the beginning, was the World. へとちかのぼる。酔眼の中には創世紀の風景が浮かび出している。

暗か、眠りか、沈黙か、混沌からか——と規定することと自体が既にこの Boredom か Yawn に象徴される世界から He spoke の世界、ことばの世界への始まりを捕えるには矛盾しているが、跳んではならない処を跳びこえたか、禁断の木の実を食べた過誤は取り返しおみぎのつかない羽目。——読者諸氏赦し給え。いや、同罪同類と神酒おみぎあげて下さるか。——あくび、眼醒め、話しかけ、ことばは発せられる。——always beginning か。ならば、まだしも。歴史意識の発生以来、事実意識は言葉の生誕力を弱め、記憶力を強め、過去意識は言葉の論理力を積

層し、その限定力と細分力の重層の中に現在に圧殺されつづけた。始めからは遠く、永久にこない未来の間に重くたれこめる世界に人間鷹、オーデンの眼にも涙。

Sob, heavy world,

Sob, as you spin.

Mantled in mist, remote from the happy;

そして、そのすすり泣きの中に、エロス⇨オーデン⇨アガペは聞きとる。

In solitude, for company,

.....

In solitude, for company.

ミートスとロゴスの生誕が話と理との分離を内包させていたことは憶測されるが、ホーマーにおいてはミートスとロゴスは殆んど区別されていない。何れも話されたこと、話、what was said を意味していたという。ビンダルからヘロドトス、ツキジデスの頃に、突如としてミ

ートスを作り話、発話ロゴスが本当の話、理として分派し始め、やがて歴史的意識の発生と共に、logos は理性の機能に結びつけられて行ったと Gorge Whalley は言う。そして、又、聖⇨ハネ伝の中に Logos が myth との原始的結合に帰ってゐるのを見るのである。

In the beginning was the Word, and the Word was with God, and the Word was God.

この人間表現の原型を reality への没入から溢れ出る utterance ほどばしり、とみなすならば、言葉の出発点は、'magical and potent name' であり、'ハネの言葉は、'In the beginning was the Myth.' と殆んど同義であろう。現実の中へ常に、永遠に消失して行く現在に、何もいわない本来の時間と共にある知慧に帰ろうとする話がミートスならば、現代の現実にミートスはある。二千年の歴史意識の集積が現代であるならば、その一瞬の亀裂の奥深くほどばしり出るミートスこそオーデンにとって現代を読みとる、私達が支払わねばならぬ代償そのものの数々を読みとる唯一の様式なのだ。

Time will say nothing but I told you so,
Time only knows the price we have to pay;
If I could tell you I would let you know,

時間は何も言わない。ただ私がそう言っただけ。何も言

わない時間に代って私が話す虚構——ミートス……。ソ
ラムとロキアの中に浮かぶ「正しき市」Just City は
オーデン語るが故に、ここにはなぐがそこのにある……。

(一橋大学教授)